

K3

E84

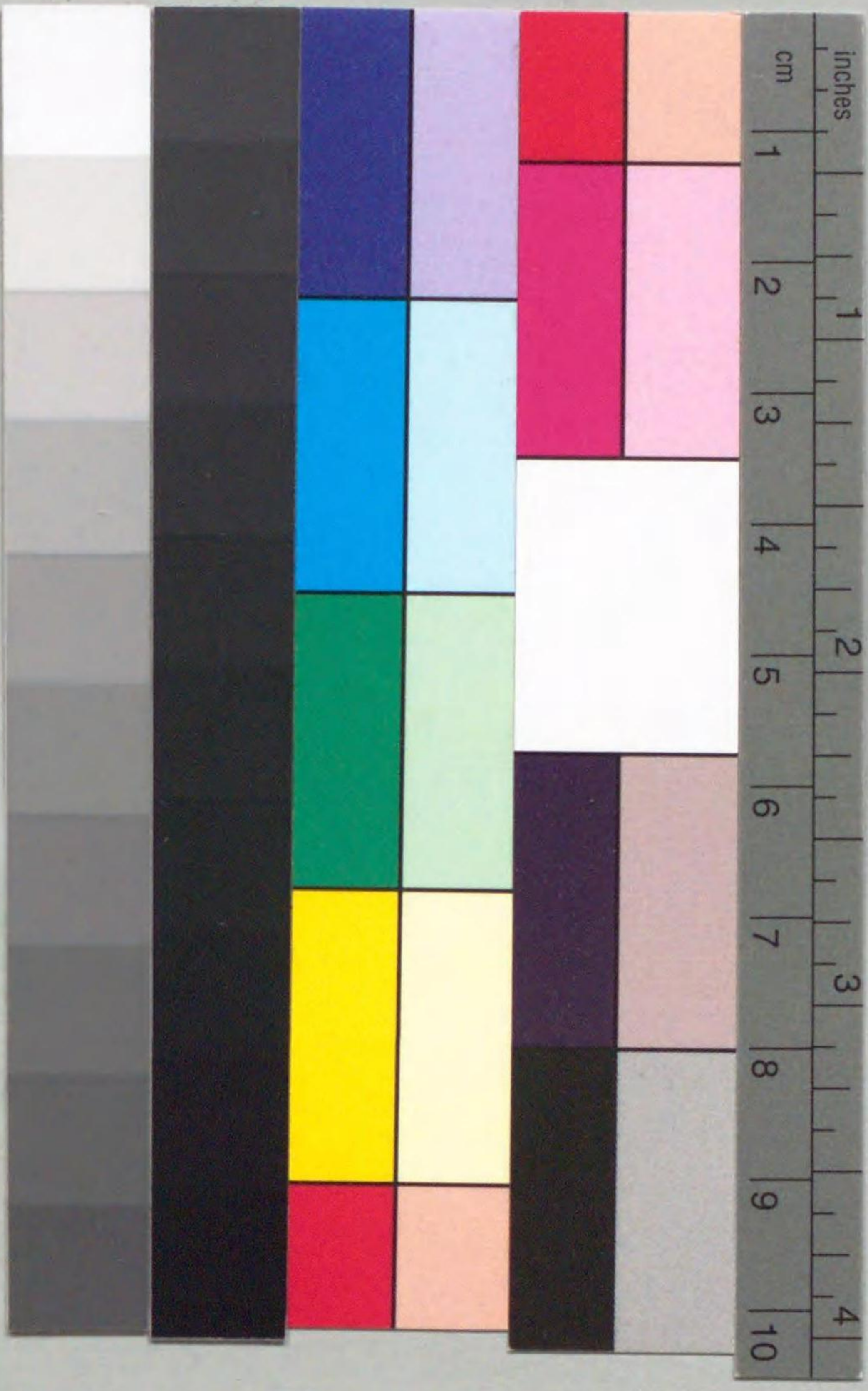


89W61728

正十四年五月  
十八日  
十六日  
（於本館階上）

向島史蹟名勝圖畫展覽會目錄

帝國圖書館

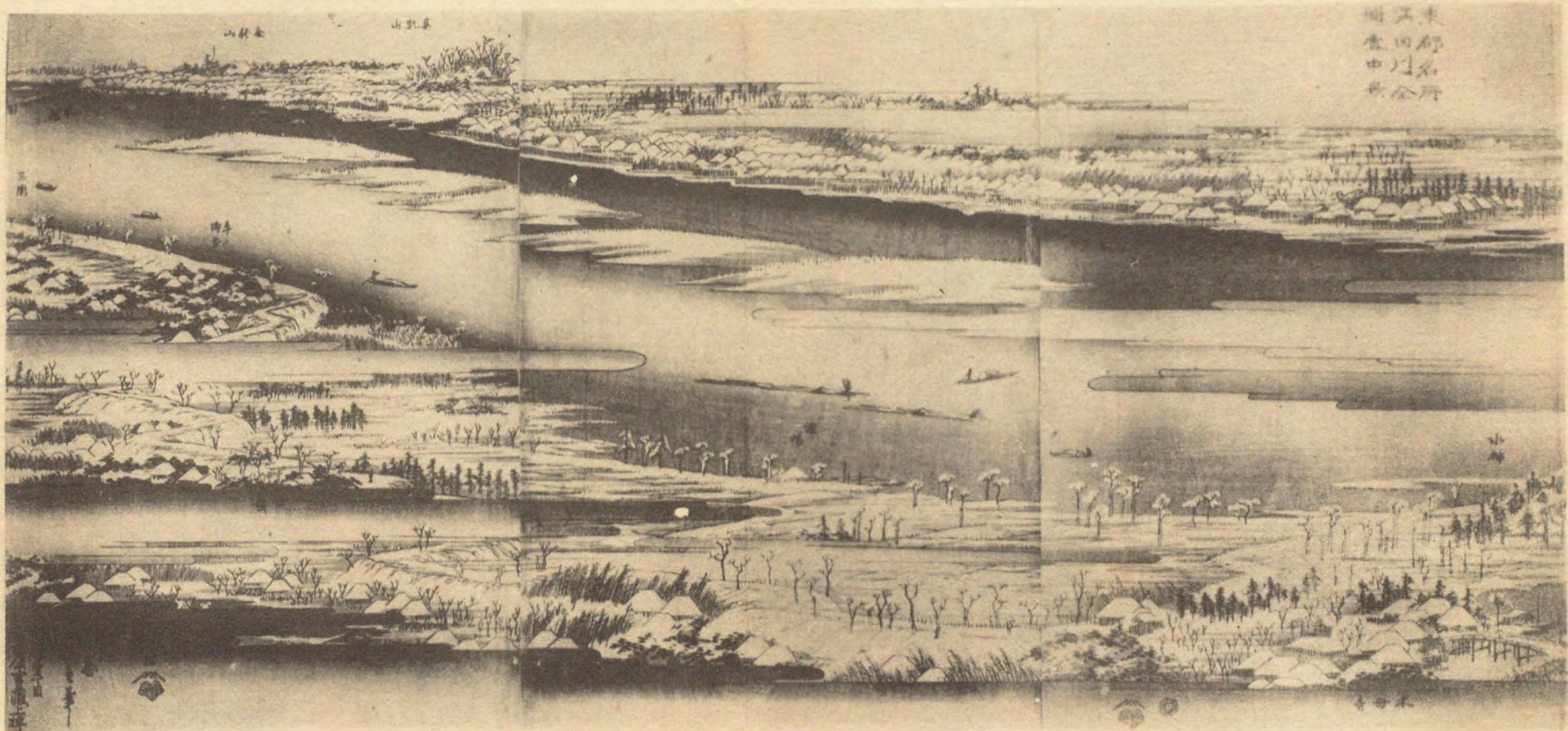


K3  
E84



89W61728

K3  
E84



# 向島史蹟名勝圖畫展覽會目錄

## 一 隅田川兩岸一覽 鶴岡蘆水畫

隅田川の上流は、荒川と稱へて、其源を、武藏國秩父郡眞之澤の東麓に發し、屈曲奔盪、川口に到りて、戸田川となり、千住川となり、隅田にて隅田川となり、淺草川となり、三谷川となり、宮戸川となり、大川となりて海に入るといふ。

輦下の名區、都下の巨水は、實に此地を以て第一と稱せらる。其隅田川に沿へる、隅田、寺島、須崎、小梅等の築堤を、向島と稱して、名園あり、古刹あり、其間を縫ふに、烟柳と露花とを以てして、沿水四時の奇賞は、今人の夢も猶及ばざるものあり。今や當年の風流は、凋零を極めて、樹枯れ、園廢し、僅かに古圖古畫に就て、舊烟波を掬するのみなり。

圖は天明の刊行にて、鶴岡蘆水の畫なり。蘆水は通稱金次といひ、翠松齋の別號ありて、文政中歿すといふ。一川晚に及んで、秋は江頭に深く、霜氣天に満ちて、然も松柏を染めず、長堤蕭條として、人影稀に、歸鴉夕暉を帯びて、最も綾瀬の邊に多し、墨堤の風光は蓋し秋に在つて、勝るものありといふべし。

## 二 帖

二 東都名所隅田川全圖 廣重畫 雪中景

三 枚

二

北地の雪は、荒涼に過るものあり。融けて流れて、情趣涌くが如きは東都の雪なり。東都の雪の名所としては、隅田川に先取權あり。  
此圖隅田川の大觀にて、嘉永六年頃の執筆なるべし。雪の畫人としての廣重は、雪の名所としての、隅田川を描く。雪は溫柔にして、筆は幽艶なり。此滿江の風流を收領して、一棹軽く下るの屋根船は、知らず何の處の遊客ぞや。

三 吾妻橋夕涼之景 豐國畫

三 枚

吾妻橋は舊名大川橋といふ。安永三年十月の創架に係る。水郷の名區は、此よりして通ふべし。橋下の畫舫、其玉人に乗せたるものは、橋名因ありともいふべし。古人橋上を過るの詩歌多きが中に、

青年此地作遨遊 花下銀鞍月夜舟  
白首楚囚過橋畔 滿川風雨送孤愁

此詩尤も人口に膾炙すといふ。蓋し水戸の藤田東湖先生、弘化二年二月、小梅村の謫居に徒らんとして、吾妻橋を過る時の口吟なり。先生歿してより七十年、行雲流水、猶當年に似たるやいかに。

四 吾妻橋金龍山遠望之圖 廣重畫

一 枚

輕舟落花を積んで春江波靜かなるの時、漸く半簾を捲いて、雲鬢風のもてあそぶに委せたり。這般の好題目を捕へ來りて、橋下の春色は、紙面にあふれたり。

五 隅田川東岸嬉森之圖 北馬畫

一 枚

北馬は北齋門にして風景畫に長じ、筆法は師の、癖あるには似ずして其長所を得たり。  
墨水の東岸小梅に接して、二橋を架せるを枕橋と稱し、橋北の松柏水に臨んで蔭をひたせるの邊を、嬉の森といふ。今の八百松のある所にして、當年天籟の颯々たるもの、今は絃歌紅燈の街となる。嬉の森を過ぎて、樓壁岸に沿うて起るものは、水戸藩侯の小梅の下邸なり。

六 東湖先生肖像 椿々山畫

一 軸

小梅の水戸邸前を過るの人は、知らず何様の感をかいただけ。其邸内の堤に沿へる所を、東湖先生幽居の跡と傳ふ。居は方丈に滿たずして、室は膝を容るに過ぎず。吏卒四隣を護りて、門戸は嚴しく鎖せり。僅かに縹緲を免されたるも、思ふに囚獄の苦に勝るか。先生謫居三年、然も意氣は凜然として、尊皇の大節を持したるの言容は、至孝の人、椿山の筆によりて傳へられたり。

七 東湖先生自筆書簡集

一 軸

青山延子、延光、兩先生と、論文講武について、應答せる書簡集中の一巻なり。先生が、高論卓見は、實に此研鑽幾年の結晶にして、其筆其書、餘事に屬せるも、猶雲起りて龍躍り、風生じて虎嘯くの概あり。

八 三圍之圖 浮繪

一 枚

三

天明頃の隅田堤を見るべし。三圍神社は、枕橋を距る一町半許、小梅村に在り。堤下に石の華表ありて、「伸  
びあがらば三圍の、鳥居の笠木」の俗曲に其名高し。祠宇は弘法大師の創建といふ。文和年中、三井寺の  
源慶僧都再興して、慶長の、隅田村築堤の時、今の地に移すといふ。  
圖は、春風江上に遍くして、衣香釵影、天は人と酔ひ、對岸の樓臺、客は淡烟に薄れて、一様に之櫻花の世  
界なり。

九 辰齋美人畫 辰齋畫

一枚

三圍邊の春興なり。辰齋、名は政之、柳々居と號す。江戸の人なり。北齋に畫法を學びて、狂歌摺物を得意  
となす。

畫中の、輕烟柳に淡くして、幽香美人を掠むるの邊、何等の俗喧なくして、一段の清興を見るべし。

一〇 三圍之景 廣重畫

一枚

祠畔の春は酣にして、花に忙かはしき、嘉永頃の風俗を窺知すべし。

一一 隅田川三圍り堤 廣重畫

一枚

後の廣重が、東都三十六景中の一なり。

晚烟花を鎖して、月色朧なるに、笑紅と媚白の何をか語れる、滿袖脂粉の香、恐らくは歸來、家人の恠しむ  
なきや。

一二 隅田堤之櫻 英泉畫

一枚

夜色、祠邊に深くして、雨を帯びたる花影の、白糝糊たるは、不遇の畫人英泉の筆に上りて、一段の凄艶を  
加へたり。其美人畫の如きは、之を此畫人に責むべからず。

一三 三圍 豐國、國久畫

一枚

豐國百人美女中の一にて、三圍は國久の畫なり。土手を背景にしての、道行ふりは、又當代の花見氣分な  
り。

一四 墨水花盛 豐國、國久畫

一枚

人は狂せり、花も癡たり、紅迷紫醉、此時節を真に一刻千金となす。

一五 隈田川花見 國芳畫

三枚

三圍祠前、輕傘春風に輕くして、無情の花と有情の花と、總べて之れ一帯の紅雲なり。

一六 三圍景 司馬江漢畫

一枚

江漢名は峻、字は君岳、春波樓と號す。初め鈴木春信に浮世繪を學び、後文晁に南畫の法を受て、遂に意に  
充たず、去つて長崎に到り洋畫を習熟し、油畫及び銅板畫を出して名聲一時に高し。文政元年十月七十二歳  
を以て歿すといふ。

圖は初夏の光景にして、微風は浪を吹いて皺紋の織なるに、嫩葉漸く陰をなして、風總べて綠なるは、十里  
の長堤興殊に多きの時たり。

一七 隅田川の落雁 英泉畫

一枚

英泉の江戸八景の一なり。

隅田川の生氣は、正面の、一點翠螺のあるありて飛動すべし。先づ紫の筑波山」の一句は、此間の消息を道破して餘すなし。

一八 三圍の秋月 豊國、國政畫

三枚

渡頭、人は歸りて、舟自ら横たはり、蒹葭に聲起りて兩岸今や秋に入る。満目の蕭條たるに、仰て遠思を、青空に懸るの女は、何の願ふ所かある。近く心を、流水に遣るの少女は、未だ離愁を解せざるに似たり。此くて風は潮の満る邊に起りて、月は雲の收る天に深け行くらん。

一九 向島雪ふりの圖 豊國畫

三枚

初代豊國の、役者十二ヶ月の一なり。

銀堤玉樹反つて遊子の行樂を促し、三圍祠頭は早く既に、一脉の春光を傳へたり。

二〇 暮雪 長喜畫

一枚

江戸名所八景の一にして、三圍の暮雪なり。二州白白、僅かに一水の碧あるのみなり。

二一 隅田川兩川岸一目の月 廣重畫

一枚

銀世界十二景の一にて漆繪なり。

半輪の寒月に、奇趣なきも、人と影と相伴ふの邊に、十二分の清寒あり。

二二 隅田川雪見 芳虎畫

三枚

寒江の悲風は雪を吹いて、渡頭の少女は、殘年にいそがはしきを、歸舟靜かに絃聲を調へて、新曲を弄する者あり。

二三 其角肖像と眞蹟 華山畫

二枚

三圍に賽するの人は、先づ夕立の句について其角に想到すべし。其角の蕉門の豪たるは天下周知の事たり。此圖華山先生に板畫あるが既に珍なり。雄健の筆は豁達の人を寫す、奇絶たり、妙絶たり。

二四 角田川 豊國畫

三枚

江戸名所發句合之内の一なり。春色兩岸に満ちて、一碧の江水細漣を漾すの邊に、美人の船は、三圍堤下を過ぎて、眞土に向ふが如し。當代の今様風俗は、豊國の筆に上るもの多し。

二五 屋形船花見の圖 國貞畫

三枚

絃歌江心に満ちて、春波畫船を送り來る。人界に猶此境ありや。

二六 船中美人之圖 英山畫

五枚

菊川英山、名は俊信、俗稱爲五郎といふ。其家造花を業として、其父英二畫名あり。英山幼時父に就て畫法を學び、後北溪に師事し、更に歌麿の筆意を慕ひ、遂に美人畫に大成すといふ。文化頃の人なり。圖様は當代の上流婦人を描けるものにて、一船衆芳を乗せて下るの所、長流春漸く深きに似たり。

二七 江戸の花屋形の納涼 豊國畫

三枚

八

墨水の新霽を占得して、絃聲は天氣と和調し、碧波は羅綺と舞ふ。縉紳の家庭を寫して、他に各種の婦人を點出す、時代の風俗を察するの資料たり。

二八 船 鑑寫

一帖

享和の舊圖なり。隅田の川筋は、屋形舟にて聞え、日除舟(屋根舟)にて知られたり。其構造の大なるを屋形と稱し小なるを汁溢しるこぼしといふ。屋形は元來幕府の遊船なりしを、慶安頃より、大名豪富の間に流行して、享保頃には其數、百隻に達したり。其後屋根舟の新造ありしより、屋形は汁溢し型をのこして、流行は屋根に轉じ、更に山谷通ひは猪牙ちよきの輕快を喜びて、船宿と共に其數六七百に及びしを、當年の櫂聲棹歌、今將た何の邊ぞや。竹屋の渡頭今日は唯、無情の潮の去來するのみ。

二九 隅田川の春景 國芳畫

三枚

國芳の畫は「イナセ」なり。婦人の姿勢は快きやんにして、縞柄は深川好みなり。圖様の小褻とる手は、凜りんと拗すれても、鬢のほつれ毛に、川風ぬるき江上の春光は、眞に之れ江戸の天地ともいふべし。乗捨てたる屋根舟に波のさやく長閑けさを、浮いてかもめの、吟情は一に此邊に在り。

三〇 花 曇 豊國畫

三枚

豊國は國芳に比して品位あり。品位は常習を脱せず、脱せざるが遂に平凡となる。船上一朶の紅雲より波山の秀黛を幻出するは可なり。

三一 隅田堤の彌生 廣景畫

一枚

名所道外盡の内の一なり。色を賞めて、花下の一方に偏するや、床机權衡を失して、彼我顛覆す。媚びを賣るの花に罪あり、色を賞づる者更に大なり、諷し得て妙云ふべからず。

三二 東都隅田川八重櫻 立祥畫

一枚

對岸の遠望奇ならざるも、花を描いて親切なり、飛燕來去、此よりして江戸氣分に入るべし。

三三 隅田堤の圖 豊國畫

三枚

流水落花を促しきりて、渡頭に春事非なるも、新緑の風は一帆青くして、臉上の淡紅は頗る生氣あり。

三四 東京開化三十六景 廣重畫

二枚

明治初期の花見風俗なり。

三五 隅田堤のさくら 清親畫

一枚

艶雲天に漲りて、綠草と紅裙と、澤上の春色は眞に紛々たり。

三六 隅田川 清親畫

一枚

明治三十年頃の、堤上堤下は、猶記憶に新たなるべし。



三七 女あるじ花見のめいてい 國周畫

一枚

櫻は落花に風情多きを、姥櫻の痴態は、嘔吐三斗の感あり。花間平生に、此徒の濶歩を見るを遺憾とす。

三八 四季の詠、隅田堤の櫻 周延畫

三枚

色彩の厭ふべきあるも、春風芳草、空しく當年に似て、人事の變遷、風俗の推移は、三十年前の殘夢を想起するものあらん。

三九 隅田川夜 清親畫

一枚

燈影微茫として、江心に搖曳し、暮靄對岸を染盡して、戀も無情も總べて之一様の紫なり、渡頭の風流は此時を第一とす。

四〇 雪 見舟 月耕畫

一枚

婦人風俗盡の一なり。雪の黄八丈に、畫家の氣轉を察すべく、婦人の用意は、此點より悟入すべし。

四一 隅田堤遠景之圖 豊國畫

三枚

對岸より墨堤を、遠望せるの圖にて、紅雲十里漸く盡るの邊に、碧嶙並立するを筑波となす。山の翠影は水中に落ちて、濛々宮戸川の碧となり、樓上の衆芳は、春光の權化する所、霞光風影人を惱殺してあまりあり。

四二 花揃戲場の道連 豊國、國久畫

五枚

人物は豊國にして、風景は國久なり。名優の花形と、東都の名所とを對照して、別に向島の名物を衣裳圖案に應用したるは、尋常畫家の及びがたき點にて、豊國の當時に名ありし所以なり。彦三は技藝の大家にて、時代に可なり、世話に長ぜり、今を盛りの花の面影は蓋し花中の王たるべし。卯の花月夜に杜鵑は、庵崎の夕べゆかしき染模様なり。朝日まげゆき花の香ひには、大天才の將來を見せて、模様の蜻蛉は秋津にして、やがては秋津島に名をとどろかす、九代目の未來を、寺島名物に示したるなり。枝垂櫻の嬌態は田之助の藝風に似て、都鳥は東の都を代表し、曙山は人氣の頂點たり。山櫻の清楚は、江戸藝の洒脱に似て、變化の自在は、花屋敷の菊花の、色衰へぬを、五代目といふべきなり。

四三 隅田川雪中の圖 廣重畫

三枚

天地寂として、銀界は開けたり。傘上の雪は猶かるけれども、相思の情は墨堤にやつもるらん。

四四 隅田川雪の朝 廣重畫

一枚

晴雪は三月の花よりも白くして、水邊の高樓は、佳人の眠り猶さめぬに似たり。

四五 櫻に小鳥 廣重 畫

一枚

一一

牛島附近は、野畦屈曲して、水斜に橋横はり、蝶情蜂思、却つて塵縁を脱する者あり。一路盡て、一路生ずる所に、櫻花一枝芳香を吐くものは、暖風江東に満ちて、十二分の清味あり。五世團十郎嘗て此間に退隠して、成田屋七左衛門と稱すといふ。

四六 團十郎舞臺似顔繪 豊國 畫

一帖

五代目は、世に向島の親玉といふ。一語は彼の技藝と性格とを盡し得たり。寛政八年此地に閑居して隅田川ありやなしやに暮せどもいざこざ聞かぬことぞ嬉しきの口吟あり。文化三年十月三十日六十六歳を以て歿す。

四七 五百崎虫の評番 市川白猿、淡州樓焉馬合著

一冊

享和四年の刊行なり。

向島は元來昆虫の種類多きを以て聞えたり。蟻の義と、蟪蛄の勇と、蜘蛛に知ありて、蝴蝶に姿致あり。其他徳操あると技能あると、其事の奇を擧ぐるに、輕妙の文を以てす。白猿の風骨は、此一事に察すべきなり。

四八 畫本虫えらみ 歌麿 畫

一冊

此書は天明八年の葛屋刊行に係るものなり。百虫の、秋夜月に語るの情思と、春陽花に舞ふの姿態は、此畫ありて其眞を傳ふべき乎。五百崎の小虫は不朽といふべきなり。

四九 請地秋葉の境内 廣重 畫

一枚

江戸百景中の一なり。秋葉權現は、請地の内にて、正應中遠州の秋葉を勸請せりといふ。當時は殿宇宏麗にして、池を穿ちて園を開き、青松紅楓、墨堤第一の幽邃なりしもの、今は畫中につきて古趣を掬すべきのみ。

五〇 會席茶屋之圖 廣重 畫

二枚

川魚料理は向島の生命にて、請地附近の、武藏屋、大七等何れも精饌を以て聞す。武藏屋は當初麥飯を以て營業せしより、麥斗庵の稱あり。天明六年四月中、虫の評番の著者たる淡州樓焉馬は、はじめて此武藏家に嘶の會を起して、「向島の武藏屋に、はなしの會が權三りやす」の引札は今に傳へて有名なり。

五一 落嘶詞葉の花 烏亭焉馬撰

一冊

寛政九年以上總屋利兵衛の刊行にて、落語中興の開祖たる焉馬老人が、自作の落語に、同人の小嘶等を纂録せるものなり。當時戯文戯作の棟梁たる淡州樓が、武藏屋樓上に、齒ぎれよき語り口の、如何に人氣に投じたるかは、此より落語の職業を出したるにも知るべきなり。

五二 五百崎の杜鵑 廣重 畫

一枚

庵崎の地は、秋葉附近なりといふも、遂に其所を確知しがたし。然も杜鵑の名所として、作句、詠歌世に多

一三

し。夫れ紅飄りて、紫盡るの時や、向島は、綠陰幽草、實に幽人韻士の天地たり。既にして、岸の柳に日は暮れて、半江月煙ふるの時に、一聲の杜宇、多情多感の客を、愁殺するの光景は、一筆呵成して然も餘韻あり。

五三 隅田川 廣重 畫

一枚

牛の御前を堤下に見て、香雲一段深き所より、道はやゝ右に屈曲して、春色の愈々深きを見るべし。

五四 こと問だんご

一枚

東京自慢名物會の一なり。言問團子は向島名物として、其名は都鄙に喧傳せるが、明治の初年に外山佐吉翁の創意なりといふ。其名の業平の和歌に起因せるは、之を詳説するの要なからん。

五五 商牌 雜集

一冊

言問團子の商牌なり。隅田川に在るは、鴨の一種にて、學術上都鳥と稱するとは其撰を異にすれど、己が名の都になりぬ都鳥。今は都の隅田川なり。其名は雅にして、其土地にふさはしきを、強て都鳥ならずとは云はてもありなん。

五六 隅田川と在原業平 豊國 畫

一枚

業平は、平城天皇の皇子阿保親王の第五子なり。天長中下りて臣籍となり在原の姓を賜ふ。其容貌の秀麗花の如しとは、此に眞偽を斷じがたきも、藤原氏の專横を慨して、去つて東國に爲すあらんとして遂に志を果

さず、墨川無限の舊烟波は、千古僅に此都鳥の歌を傳ふるのみ。

五七 伊勢物語 細川玄旨自筆書足

一冊

業平の名を知る人にして、伊勢物語を讀まざるはなし。書名一に在五中將物語ともいふ。其作者は、古人の説區々にして、一定せざるも、業平の自記に、後人の補足せるものならん。行文は簡潔にして、筆法の古雅なる、古今恐らくは其比なきか、本書は慶長前の古寫本にして、卷中細川玄旨の自筆書足しは、好事家の珍賞する所なり。玄旨は有名なる細川幽齋にて、幽齋戦亂の巷に在り、伊勢の研鑽日も亦足らず、遂に闕疑抄を著して、其難解の文字を註すといふ。

五八 隅田川都鳥の故事 廣重 畫

一枚

筑波の山の、彼面此面かのもこのもにしげき思を、閑鷗に托せる吟咏は、柳枝悲風を帯べるの渡頭に立ちて、清怨限りなし、後人追慕して、中將の靈を祠り、言問岡と曰ふ。岡下の蘆荻は蕭瑟たり、岡上の暮霞は凄迷して、來弔するものは、歌ふべく泣くべきなり。

五九 式亭狂文集戯想文 三馬 稿本

一冊

隅田川は、都鳥にて名高く、江戸の風雅は、都鳥にて支配せり。時好に投ぜる都鳥の酒杯が、風流才子に愛用せられたるは云はてもありなん。式亭三馬は當代狂文の泰斗たり。其文を遣るは淡々として、隅田川の水の如く、其字を役せる飄々として、墨堤の落花に似たり。此文を以て此名物を披露せる、蓋し報條ひきふだの上乗なるべし。書中墨田川の繪は、國直の自筆なり。

六〇 向島堤の花並さくら餅 廣重 畫

一枚

江戸自慢三十六興の一にて、後の廣重なり。土手有名の櫻餅は長命寺の境内に在り。寺は當初常泉寺と稱へたりしを、家光將軍、向島に出獵の寛永中、寺號を長命と賜ふといふ。餅の山本屋は享保中よりにて、香を踏んでかへるの人は、誰も々々家土産にとは、先づ花に因みの此宿をや訪らふらん。

六一 倭風俗墨堤の花 周延 畫

三枚

櫻餅の、招きの旗の手は、春風に長閑にて、狂蜂痴蝶、花をめぐる忙し。

六二 名物櫻もちの圖 英泉 畫

一枚

遠望の春色は妖嬌を競ひて、花あり團子あり、十二分の満足といふべし。

六三 江戸時代名物集

一帖

櫻餅の商牌なり。香味の、淡くして清涼なるに聲價を得たり。

六四 春季心女遊 國芳 畫

三枚

長命寺を過ぎて、土手の櫻は色香深し。堤下の春色は今や爛漫として、寢よげに見ゆる若草の、摘みて摘まる、春の心は、空の光りと一様に此新晴の好日和なり。

六五 隅田川之朝霧 國芳 畫

三枚

墨流染より、轉化せる意匠の大膽には、先づ覽者の膽を奪ひたり。曉霧の遠近に、幻影の濃淡を描寫せるは、此人にして此筆を使用すべし。更に三美人を拉し來りて、花見衣裳に、藏前の粹と、木場の滋味を説くところ、場中出色の名畫にて、浮世繪近古を通じての絶品なり。然も畫は國芳なり、櫻は國花なり、國芳國花を畫がくといふべし。

六六 隅田堤櫻の木 廣重 畫

一枚

一帆は遠く落花と飛んで山影に没し、満堤の香雲は塵なくして酔を買ふによるし。筆々輕妙にして、自然の真相を捕へ得たり。

六七 堤の行かひ 直方 寫

一軸

堤上の春興を寫せる者なり。堤は遠く北條氏の築く所といふ。元和中秀忠將軍の時に、櫻樹を植ゑたるを始めとして、享保の有徳公の時、三圍より木母寺の間に、更に柳櫻桃を植ゑたるが、柳桃漸く稀にして、櫻花のみは年ごとに増殖して、寛政の家齊公の時には、更に大補植を加へて、向島の風光は、江戸文化の爛熟期に大成せりといふ。若夫れ花時に至るや、萬櫻一齊に路を挟んで、宛然一種の白雲洞たり。遊人目眩して、行客神を蓋かす。都人士往くを争うて、肩摩轂擊、九十の春光は遂に狂舞酣歌に終りて、紛紛たる雜沓は、他に比すべきなし。此圖當時に在りて、當時を寫す、當年墨上の春色は、此一巻に存せり。

六八 中野碩翁園池圖 抱一原圖

一枚

文政中向島唯一の名園にして、今の太倉氏別邸の邊なりといふ。中野碩翁は幕府の旗下にして、播磨守清茂といふ。其女於ふみの方の、十一代家齊將軍の寵姫たるの縁を以て、特にその殊遇を受け、此向島の別寮の如きも、恩賜の一なりといふ。幕府全盛の絶頂期に際し、名匠を網羅し、巨資を投じたるもの、永く園庭學の範となすべし。

六九 源頼光公館土蜘蛛妖怪圖 國芳畫

三枚

碩翁は一代の寵臣にして、権力は多く老中の上に出づるといふ。劇にて有名の河内山宗俊が、横行濶歩、隨所江戸前の啖呵に、世人の狂喜を博せし如きも、一に碩翁の庇護あるよりといふ。以て碩翁の權勢を察すべきなり。

天保五年、水野忠邦の老中たるや、猛然として弊政の大改革を企圖せり。新進氣鋭の水野越前と、勢利併せ得たる碩翁とは蓋し當代無比の好取組みたりしなり。

此畫當時の改革を諷せるものにて、季武は越州を指すなるべく、其雲烟中に朦朧たる百鬼は、總べて改革の血祭りたりしの徒なり。中に羽團扇を翳せる禿頭翁は、水野が仇敵視せる、中野碩翁なり。機智に富めるの國芳は、天保の大變革を、巧みに一紙に縮寫し、版行事畢りて、漸く世に出んとして、直ちに絶版の運命に遭遇せしより、此畫世上に存するは、稀なりといふ。

七〇 向島花屋敷七草 廣重畫

一枚

通稱花屋敷、百花園は、寺島の舊の多賀屋敷跡にて、菊屋宇兵衛事菊塙の文化年中の創業なり。菊塙は山本

北山門にして、其身商估に出て、尋常射利の人ならず。花屋敷は梅屋敷ともいふ。園中榻を聯れ、亭を設け、高雅清潔、扁額柱聯等總べて名家の手に成り、此間梅樹一千株は春淺き墨堤の百花の魁となり、別に萬種の珍花奇草を點在して、新秋雨後の觀に供す。蓋し江東の名勝中尤著名なるものなり。其草露珠を跳らして、幽蟲の啾々たる景は、士女遊觀の佳處を描き得たり。

七一 東京百花園芍藥 立祥畫

一枚

蛙聲閣々午晴を報ずるの時、人は新緑を看ずして紅雲を看る。

七二 潤色三十六花撰 國周畫

一枚

花と花と、芳をたゝかはし、研を競へるもの。

七三 七草の園 月耕畫

一枚

一園紛華を絶つ所、老來却つて此靜趣を愛す。

七四 墨田河百花園七草 月耕畫

三枚

江東の秋晴は歩を移すによろしくして、滿庭の紅黃と、一路の紫白と、好景は春に勝る幾等といふべし。

七五 隅田川渡し圖 廣重畫

三枚

橋場渡頭の大觀なり。一に隅田の渡りともいふ。蒼波漫々、白鷗群を成して、渡船蘆葦の間を過ぐるの時、市外の風光は此地に到りて、絶佳といふべし。在五都鳥の歌も此舟中に在りてと傳ふ。此地古くは奥州の官道にて、治承中頼朝の北伐に際し、千葉常胤に命し浮橋を造りて軍を濟すといふ。白鷺は綾瀬の天をかすめて、歸帆鐘が淵を乗せてはしり、さし下す筏の末には水烟起りて、夕陽は歸鴉に黒し。新粧の少女は「誰に見しよとてべにかれつけて」江戸の風流は偏へに此一船に在り。

七六 橋場暮雪 廣重畫

一枚

廣重傑作の一なり。舟中の紅を見て堤上の白を知らず。妙は此邊に在り。

七七 墨田河橋場の渡、かはら竈 廣重畫

一枚

江戸百景の一なり。繁花一場の夢は、遂に立上る烟の末の、消えて跡なきに蕭條たり。

七八 隅田川橋場渡之圖 廣重畫

一枚

半纏の短かきを「いなせ」として、袴のふきの厚くいてたるを「いき」と稱へし嘉永頃の風俗に興味あり。

七九 東京橋場渡黄昏景 清親畫

二枚

前者は水面の妙境を捕へ、後者は雲烟の變幻を寫せり。清親翁の畫才は測るべからざるものあり。

八〇 一遍聖繪詞 法眼圓伊原畫

一軸

十二卷本の一遍聖繪詞の第五卷目なり。

上人は時宗の開祖にて、諸國を遊行化導すること十六年、足跡六十餘州に遍しといふ。正應二年八月兵庫の眞光寺に寂す。五十一歳なり。

繪傳は法眼圓伊の筆にして、氣品清雋、就中、山川樹木に獨得の手腕ありて、一水來りて新奇あり、一山生じて變化あり、古畫卷中風景畫の明星たり。

石濱は橋場渡頭邊の總名にて、川の西岸に屬するも、鎌倉時代をみるの好資料なるを以て此圖を示せり。繪卷の執筆は正安元年なれば、後伏見天皇即位の年にて、鎌倉は北條貞時執權たり。

道俗の面目躍如として、邊土の風光歴然たるに、長橋雪に横はれるは六百餘年前の隅田川なり。

橋場は古橋の跡の名にして、江戸の中世に、其水底に橋柱五本残れる由を傳へて、其古木にて、文臺をつくれるを、屋代輪池翁の秘藏せる由の佳話あり。

橋柱あとを何處と知られとも橋場の名のみ今にのこりて

八一 木母寺の雪 豊國畫

一枚

百人美女中の一なり。木母寺は隅田堤にありて、貞元年間の草創なり。昔は梅若寺と呼ばしを、天正十八年家康公參拜の時に梅柳山と稱し、慶長十二年近衛信尹公の、隅田川逍遙にあたり、梅の字をわかつて木母寺の號を賜ひし由なり。

江戸時代は東叡山末にて、慶安以後は寺料の寄附もありて、寛文には當寺建立の命あり。寺を包むの雪は黄昏に暗くして、岸に沿ふの舟中には殘年を送るの句あり。

八二 むさしやの圖 國貞畫

一枚

門外の長流は水秋の如くにして、樓後の柳陰に夏を宿さずといふべし。

八三 木母寺雪見 廣重畫

二枚

初二の廣重に、江戸と東京とを對照すべし。

八四 木母寺内川御前裁畑 廣重畫

一枚

江戸百景中の一なり。蘆荻洲に満ちて、返照楓葉にあつまるの時、松籟の聲は蕭瑟として、美人の影は暮烟に迷ふの清景、奇言ふべからざるものあり。

御前裁畑は、隅田御成の際に、調進すべき、野菜果實の培養場なり。

八五 梅若の供養 廣重畫

一枚

梅若忌は三月十五日にて、向島行事の一なり。今は四月の十五日に大念佛供養ありといふ。

八六 梅若神社 清親畫

一枚

明治の初期に際し、木母寺の廢寺たりしの時、梅若神社と稱へしなり。

梅若の涙雨とて、四月十五日の忌日には、必定降雨ある由なり。

八七 月の梅若 月耕畫

一枚

怪漢忍の藤太、薄命の少年梅若丸を、おびやかすの圖にて、堤上行人の跡なく、江心夜深きに、無情一片の月のみ、空さりげなく澄みわたるも哀れなり。

八八 木母寺梅若の由來 廣重畫

一枚

舊蹟盡しの一にして、梅若丸の事蹟を傳ふ。萬里居士の詩集にも、河邊有柳樹、蓋吉田之子、梅若丸墓所也其母北白川人なりと註して、古くより甲客の多かりしを、東照公の梅柳山梅若寺と命名以來は、淨瑠璃小説等にも潤色せられて、梅若の名は廣く世上に喧傳せり。

八九 改謠 曲 觀世元章編

一冊

明和二年刊六十一冊の内の一冊にて、卷中の隅田川は梅若の事蹟を物せしなり。

九〇 出世隅田川 市川團十郎作

一冊

狂言繪本にて、元祿十四年の中村座秋狂言にて、水木ひめの介の梅若丸、大當りの由なり。

九一 雙生隅田川 近松門左衛門著

一冊

梅若の竹本淨瑠璃として、近松執筆の名作なり。

九二 梅若丸一代記

二冊

天明八年大阪にて和泉屋の刊行せる、浮世草紙としての梅若丸なり。

九三 墨田川梅柳新書 曲亭馬琴著

六冊

讀本としての梅若は、著者の妙文と、北齋の名畫にて有名なり。

九四 十寸見要集

河東ふしとしての隅田川は、謠曲よりいで、音調愈愴然たり。

一冊

九五 都羽二重拍子扇

八冊中の二篇めにて、巻中の賤機帯は、風清露冷の音あり。

一冊

九六 隅田川水神森 清親 畫

水神は木母寺の西南に在りて、水に沿うて綠樹重陰たり。詞前の酒樓は八百松なり。満天の暗雲は江上を劫して、雨脚樓頭に忙はしきは花時中此地に多きの景なり。

一枚

九七 隅田川水神の森 廣重 畫

當時の野趣は今日に見がたきも、其面影を回想すべきは唯此邊あるのみ。晚霞曲江に流れ、歸帆野草を走る、幽艶の境といふべきなり。

一枚

九八 關屋の里 芳年 畫

月百姿中の一なり。牛田の西光院の邊にて古關の舊地といふ。今は天神の小祠ありて關屋の名を傳へたり。畫は古歌の心を寫したるものなり。

一枚

九九 綾瀬川の合觀 立祥 畫

三十六花撰中の一なり。俗塵なく、俗氣なし。

一枚

一〇〇 綾瀬川鐘か淵 廣重 畫

鐘が淵は隅田河、荒川、綾瀬川の三又の所をいふ。昔時普門院の梵鐘此に沈めるより名を得たり。或は長昌寺の鐘とも、保元寺の鐘とも傳ふ。其是非を知らず。兩岸の蒹葭蒼生して、布帆相逐ひ宿鳥後先するの、水郷の遠景は此に盡たりといふべし。

一枚

一〇一 隅田川の七福神 とり女、國芳等畫

七福神の起源は、仁王經の七難即滅、七福即生に基因して、日本支那印度の舊説につきて、七福神を見立てたりといふ。其流行は足利末ならん。惠比須は攝津西の宮の蛭子の神とも、事代主神ともいふ。大黒は印度の大黒天に大國主の神を附會し、毘沙門は印度の佛法守護神にて、辨財天は此も印度の宇賀神將に、嚴島明神うかのみたまと倉稻うかのみたまとを附會せり。福祿壽は支那の宋代の道士にて南極星の化身なりといふ。壽老人も福祿壽と同一星にて、布袋和尚は支那宋代の禪僧長汀子なり。江戸時代に在りては、早春の七福参りと稱し、隆盛をきはめて、其所在は向島、谷中、山の手の三所にて向島は尤も高名なり。隅田川の展覽會は、最後に此七福神を請來して、七福即生を祈りて終末を告るものなり。其所在地は、三圍の蛭子と大黒、弘福寺の布袋、長命寺の辨財天、白鬚の壽老人、花屋敷の福祿壽、多聞寺の毘沙聞天等とす。

七枚



一〇二 あやめに美人 歌 磨 畫

三 枚

今の綾瀬村の附近は、古來より花卉の栽培を以て業とす。此を以て家々清香四時にたえず、戸々の群芳朝暮に馥郁たり。村娘野郎、開花をまつて、之を江戸の市街に出す、之を花市場といふ。又一代の風流なり。天保中小高某、其堀切村に園を開き、武藏屋又之に次ぐ。園中水を蓄へて、専ら菖蒲を種ゑて、品類年と多し。此より堀切の花菖蒲の名は都下に喧すしくして、遊人一村に盛なり。地は隅田の堤下より右折し數丁にして達すべし。

江樹涼を含んで新緑の風は午晴に可なるの時、紅粧の佳人は既に、園中紫雲凝るの所にあり。

一〇三 堀切 菖蒲 豊國、國久畫

一 枚

百人美女中の一なり。微風花に渡りて、心海波紋を生ずるは、靜中動ありといふべし。

一〇四 月 豊國畫

一 枚

畫樓靜にして双蝶驚かず、霞彩水に横たはりて花影移るの情景なり。

一〇五 堀切の花菖蒲 廣重畫

一 枚

江戸百景中の一なり。水際たちたるの語は其花を評すべく、すつきりの言は其形を盡せり。其白なるは斜陽によるしく、其紫なるは曉靄によるし。雨の淡粧、晴の濃抹、何れも奇なり、何れも妙なり。

一〇六 堀さきり花菖蒲 豊國、廣重畫

一 枚

江戸自慢三十六興中の一なり。暖風午晴、花と花とは、嬌容漸く懶うきに似たり。

一〇七 同 廣重畫

一 枚

東都三十六景中の一なり。品種滋多なるも、遠くしては只一場の羅綾のみ。

一〇八 木下川杜若 立祥畫

一 枚

三十六花撰中の一なり。子規啼やぶるの、燕子花には、清怨の情思あり。

一〇九 堀さきり花菖蒲 廣重畫

一 枚

四十八景中の一なり。眼界燦爛の外に、一水小丘をめぐりて清し。

一一〇 堀切花菖蒲 清親畫

一 枚

一望紫雲の蹊躑たるを見る。

一一一 明治年間妻君之風俗 芳年畫

一 枚

風俗三十二相中の一なり。之を當年新進婦人の服装となす。

一二二 四季 遊 周延畫

三 枚

遙翠は掬すべく、近紅はしとれとなすべし。別に紫蓋を張つて波を踏みきたるの花あり。

一二三 初夏の園 周延畫

三 枚

富貴に驕るの牡丹に銜氣ありて、世を拗れたるの菖蒲にのみ洒落あり。

一一四 堀切の菖蒲 月耕 畫

三 枚

一池花を看着水を看ず、紫白相繡す、眞に錦繡なり、眞に彩雲なり。亭上別に瀟洒の客ありて、満目一様の清新なり。

一一五 堀切の雨 月耕 畫

一 枚

淡烟は花を封ずるより反つて濃艶なり。微雨は宿醉を洗つて一傘軽きが如し。

一一六 今様美人 年方 畫

一 枚

花香艶露、一段の涼味を覺へたり。

一一七 千種の花 輝方 畫

一 枚

花に楊妃の出浴の姿致ありて、淡粧の人は雨後愈清艶なり。

一一八 劇の隅田川 豊國 畫

十五 枚

劇の背景としての隅田川と向島なり。  
花水橋の遠景は、長堤一抹の紅雲を看るべく、三圍堤下には人、花に酔ふべし。入日は鳥居の笠木に落ちて、渡頭閑鴨浮び、堤上雨暗きには行人漸く稀れなり。其夜色對岸を封じて花神の出遊するや、鬼氣人をおそふて凄艶なり。

一一九 花のかゞみ 狩野良信 寫

一 軸

白は梅と稱し、紅は桃といふ。梨や、杏や、其他千紫萬紅、其物について其名あり。獨、花と呼ぶものは、實に櫻あるのみ。其花中の王として絶美なるを察すべきなり。夫れ花の遠きは濃々雲暗きに似て、近きは淡々雪凝るが如し。落花は輕風をまつて薫り、細雨は花顔を染めて艶なり。良信、之を山川に探り遠近にたづねて、一瓣を寫しては淡く、千葉を描ては密なり。名花一堂に會して、花神其色を競ふにも似たり。

一二〇 花菖蒲圖譜 永齋 寫

一 帖

牡丹は富麗なるも嬌態なし。海棠は艶美に過ぎて芳香乏し、其楚々たるの姿容は、微風鬢脚垂れて翠袖羞を遮り、淡粧僅になりて然も紅粉の氣なし。頸瘦せたるは宿願遂げかたきの故か。身の細きは遍へに新愁の生ずるが爲なり。宛として之天女の人間に落つる如きものを菖蒲と爲すなり、蓋し此花の大江戸氣質に合する故ありといふべし。風流の才人たるもの、先づ此畫卷を展観すべきなり。

山岡書店

〒180 武蔵野市中町1-21-5  
TEL 0422-51-9772

¥4500

(東京神田 三秀舎印行)